

特集にあたって

本号では、これからの救急医療の課題の一つである“高齢者救急”を取り上げ、とくに“地域包括ケアシステム”とのかかわりに焦点を当てた。弊誌ではこれまでも「高齢者救急診療（第35巻第6号）」「地域包括ケアと救急医療（第38巻第9号）」を特集してきたが、これからは地域での生活における医療と救急医療の連携がよりいっそう重視されることが予想され、かかりつけ医・在宅医と救急医がお互いに高齢者の生活に想いを馳せることが望ましいと思われ（東一成，他：日本臨床 74：203-214，2016），そのために救急医が現場で活用できるような特集を意識した。

まずはじめに、今後の医療の方向性や地域包括ケアシステムと救急医療の連携、高齢者医療や介護の制度、生活や住まいと医療のかかわりについて取り上げた。次に、現場で役立つ老年医学の知識とともに、高齢者に多い疾患への対応を具体的・実践的に解説し、最後には、高齢者救急にもう一步踏み込むための知識やトピックス、治療の限界にも触れた。

このような特集が、すべての救急医が“今”の高齢者医療を知り、世界でもっとも高齢化が進んでいるわが国からの研究・エビデンスの構築と発信を目指すための、そして、増大する高

齢者救急に前向きに立ち向かっていくための、小さなきっかけとなることを期待している。そして、多くの人々の生活の質の向上に結びつく救急医療の質の向上につながれば、望外の喜びである。

地域包括ケアシステムの充実には地域力の向上が欠かせない。そのためには関係する人々への医療知識の普及も必要である。ここに新しいメディカルコントロールの可能性があるかもしれない。さらに、地域力の向上は防災力の向上にも貢献し、安心・安全な街づくりへとつながる可能性がある（<http://www.disaster-medu-tainment.jp>）。本特集を通じて、最期まで地域で安心して過ごせるこれからの社会に少しでも貢献ができれば幸甚である。

なお、本特集はへるす出版発行の月刊誌『在宅新療0-100』2017年2月号（第2巻第2号）とのコラボレーション企画である。両誌で横断的に“高齢者救急”をテーマに取り上げ、表裏一体の企画として相互理解の促進の一助となれどと考えている。

『救急医学』編集委員会

親樹会恵泉クリニック/

東京医科大学救急・災害医学分野 太田 祥一